



令和4年度 苫小牧市非核平和事業

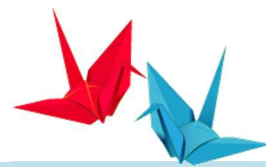
平和の翼

苫小牧市中学生広島派遣事業体験感想文集

苫小牧市政策推進課

目次

◆	中学生広島派遣事業を終えて「苫小牧市職員」	▶	1
◆	啓北中学校 2年 小林 柊斗	▶	3
◆	光洋中学校 3年 佐藤 大瑚	▶	5
◆	明倫中学校 3年 田中 葵	▶	8
◆	凌雲中学校 3年 寺谷 仁翔	▶	11
◆	緑陵中学校 2年 片野 梨花	▶	14
◆	事業の様子	▶	17
◆	苫小牧市非核平和都市条例条文	▶	23



苫小牧市総合政策部政策推進課
主事 松下 政人

本事業は、次代を担う子どもたちが被爆地である広島を訪問し、戦争と平和に対する意識を高め、広く市民に平和の尊さを考える機会を設けることを目的に実施している事業で、平成7年から行われています。令和2年度、3年度は新型コロナウイルス感染症の影響により事業を中止していましたが、今年は3年ぶりに実施することができました。実施回数は26回目を迎え、派遣された人数は今回の派遣者を加え135名となりました。

今年度の派遣事業は、7月22日に事前学習、7月29日に市長表敬を終えて、8月1日から3日までの3日間の日程で行いました。

研修初日は、早朝に苫小牧市役所を出発し、新千歳空港から羽田空港、羽田空港から広島空港へ乗り継ぎ、広島市内へ。広島国際会議場へと向かい、会議室内で“豊永 恵三郎”さんの被爆体験講話を聞きました。

豊永さんは原爆投下当時、爆心地から約10km離れた場所にいたため、やけどなど直接的な被害はなかったそうですが、翌日以降母親と弟を探しに広島市内に入った際、残留放射線により被爆したそうです。現在も後遺症と向き合い、被爆体験を語り継ぐ活動をされていて、被爆した人たちの様子など、実体験に基づくお話しをしていただき、派遣者たちにとって貴重な経験となりました。

講話終了後は、平和記念資料館へ行き、資料館東館の導入展示から本館のテーマ展示まで、1時間以上をかけて見学しました。広島に投下された原子爆弾の説明から、当時の様子を収めた写真や絵画、被爆者の遺品などたくさんの展示品があります。派遣者たちは展示物一つ一つを真剣に見学していました。

資料館見学後は平和記念式典の準備が進む平和記念公園内を散策し、研修1日目を終了しました。

研修2日目は、平和記念公園内にある原爆の子の像へ、市民の皆さまや派遣者の中学校生徒さんに思いを込めて折ってもらった千羽鶴を奉納してきました。

その後本川小学校へ向かい、ガイドの“岩田 美穂”さんのお話を聞きながら本川小学校平和資料館を見学しました。

本川小学校は被爆した実際の校舎の一部をそのまま資料館として保存しています。

岩田さん自身も卒業生で、被爆した母親の被爆体験を語り継いでいます。母親の友人のことやグラウンドで遺体を焼いていたことなど、母親から聞いた当時の状況だけでなく、後遺症に苦しむ今についてもお話しいただき、原爆の被害はまだ終わっていないことをあらためて感じました。

新型コロナウイルス感染症の猛威が続く中、猛暑の広島での研修となりましたが、無事3日間の研修を終えることができました。研修の目的は平和について学び伝えることですが、派遣者たちはそれ以外のことも多く学び有意義な研修になりました。それぞれ感じたことを少しでも多くの人に伝えてほしいと思います。

最後に、今回の広島派遣事業を実施するに当たり、御理解と御協力をいただいた皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。





苫小牧市非核平和条例に基づいた活動の1つである、苫小牧市中学生広島派遣事業の派遣者の一員として、令和4年8月1日に広島を訪問しました。

私は将来、自衛隊に就きたいと思っており、どういう被害があつて日本では、核のない平和な世界を目指しているのかを知るために、今回の派遣事業に参加し、教科書などでは学べないことを、原子爆弾の被害を受けた広島で実際に見て、触れて、たくさんのことを学びました。

まず初めに、豊永恵三郎さんの体験講話を聞きました。1945年8月6日、いつも通りの平和な広島朝に一つの原子爆弾が落とされました。そのたった一つの原子爆弾で広島は焼け野原になってしまいました。当時9歳、小学校3年生だった恵三郎さんは、中耳炎の治療のために約10km離れた病院に行っていました。すると、真後ろですごい爆発音がしました。よくわからない爆弾だったので恵三郎さんはとても不安で、その日の治療は別の日にしてもらい、急いで家に帰ろうとしました。そして電車を待っているときにふと町の方を見ると大きな黒煙が上がっていました。その中にはルーズベルトとチャーチルという人の顔が見えたそうです。その人たちは当時のアメリカの大統領とイギリスの総理大臣でした。恵三郎さんは学校で、アメリカ兵やイギリス兵は人間じゃないと教わっていたので思い浮かんだそうです。何時間も経ってやっと広島からの電車が来たと思ったら、そこから出てきたのは全身に火傷を負い、服もボロボロで、指先



からはがれた皮膚が垂れていた人間でした。恵三郎さんはそんな電車に乗り込みました。やっと家に帰ることができると思ったら、電車は別方向に進み始めました。広島の方を見ると真っ赤でした。とても帰ることができない状況だったのです。結局その日は帰ることができなかったので、近くのおじいちゃんの家で過ごしました。次の日から家族を探し始めました。7日と8日は見つからず、9日に家の近くに住んでいた人に、近くの山に避難しているのではないかとわれ、その山の中で母と弟を見つけました。母と弟は作業をするために爆心地から約1,500m離れたところにいました。その作業中に原子爆弾が爆発し、その場にいたほとんどの人が火傷を負いました。しかし弟は、母がおおいかさったおかげで怪我をしませんでした。



私たちは、戦争を経験していません。なので、戦争なんてそう簡単に起こらないと思っている人も多いと思います。今回学んだような悲惨なことを、この平和な日本で起こしてはならないと心に決めました。そのために、広島の方々から受け継いだ「平和のバトン」をより多くの人につなぎ、世界がもっと平和になることを私は願っています。



今、日本は戦争もなく、平和な時代を築いています。ですが、約80年前までは、今のような平和など一切なく、戦争をし、大きな被害を生む、悲惨な時代だったのです。



僕は、8月1日～3日に、本研修に参加し広島に行ってきました。広島では平和について考え、充実した時間を過ごしてきました。

研修1日目は、平和記念公園を見て回り、広島国際会議場の会議室で語り部の豊永さんのお話を聞いた後、資料館を見学するプログラムでした。豊永さんのお話では、実際に体験した戦争中の様子や、原爆が落とされた時どのような様子だったかなどを語ってくれました。あの日、豊永さんは爆心地から10kmほど離れた病院に行っており直接的な被害はなかったそうですが、強い爆風と大きな爆音が響いたそうです。その後、広島にいた家族のことが心配になり、すぐに家族のもとへ行きたかったそうですが、どれだけ待っても広島へ行く列車は来ず、広島から来た列車には、やけどで皮膚がただれ、着ている服はぼろぼろで、幽霊のように手をぶら下げている人が何人も乗っていたそうです。その時の状況を豊永さんは「怖かった」と言っていました。やっとの思いで2日かけ家族を見つけましたが母の顔は大きく腫れ、家族でさえも誰かわからないほどでした。家族がいた場所は、避難場所となっており、あちこちから苦しむ声が聞こえたそうです。弟は奇跡的に外傷はありませんでしたが多くの放射線を浴

びており、病気になってしまいました。症状としては下痢がひどく、ただでさえ食糧が少ない中で、食べても体に吸収されず、どんどん痩せ細ってしまいました。その後近所の人たちに食べ物を恵んでもらうなどして、回復したそうです。講話の最後には、戦後、守り続けてきた平和を、戦争経験者が減ってきている今、これから先も守り、つないでいてほしいと言われました。これは、「被爆したから」ではなく、全世界共通で目指すべき目標だと思います。ですからこれはみんなが考えるべき問題です。

広島平和資料館では、原爆でがれきだらけとなった広島の写真や、ぼろぼろになった服、人の骨の山の写真などがありました。戦争の悲惨さを生々しく感じ、深く心を痛めました。

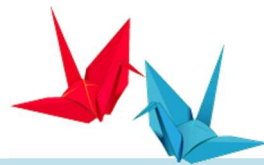
2日目には、爆心地から350mほどのところにあった本川小学校に行きました。そこでガイドをしてくれた岩田さんは、母が被爆した被爆二世でした。普段、岩田さんの母は、戦争、原爆の恐怖を思い出さないために、戦時中の話をしなくなっていたそうですが、時々思い出し、ポツポツと口に出すそうです。岩田さんはその口に出した言葉をつなぎ合わせ、伝えてくれました。本川小学校は頑丈で、原爆が落とされた後も形を保ちました。そして、すぐに臨時救護所になりましたが、薬も少なく、多くの人が亡くなっていきました。遺体は、校庭で焼いたため、今でも、地面を掘ると、遺骨が出てくるそうです。話を聞いているとなぜそんなことをしたのか、と疑問と怒りが込み上げてきました。



今回の研修で、戦争の悲惨さを学び、戦争は二度としてはいけないと改めて

感じさせられました。「本当の別れは会えなくなるのではなく、忘れてしまうこと」。そのことを心に刻み、平和のバトンを次の世代へとつないでいき、平和へ貢献していくことを誓います。





今回の研修で、私たち5人は広島に行き、原爆に関する様々なことを学んできました。その中でも特に印象に残っていることをお話ししたいと思います。

まず、広島に投下された原爆による被害についてです。広島に投下された原爆はリトルボーイとも呼ばれるアメリカ国内で作られたものです。長さ約3 m、直径約70 cm、重さ約4 tと、長崎に投下された原爆と比較したら若干小さめかもしれませんが、あなどれないほどの威力を持っています。爆心地から半径2 km以内の建物は爆風によってほとんど倒壊し、原爆が投下された年の終わりまでで死者は約14万人。被害はそれだけに留まりません。熱線による火傷、放射能による病気など……。これは当時の話だけではなく、年月を経て症状が現れることもあり、現在も苦しんでいる人がいるのです。77年経ってもなお苦しんでいる人がいるのは悲しき事実であり、しっかりと受け止めるべきことです。私はこの事実を正しく理解するとともに、現在発達している医療技術によって少しでも苦しむ人々が減ることを願っています。



次に、私たちが聞いた講話についてです。現在、広島で語り部をされている豊永恵三郎さんにお話を聞くことができました。この方は小学3年生の時に被爆されました。豊永さん自身は遠方にいたので直接的な被爆はありませんでしたが、母は全身火傷の重症で、弟は多量の放射能を浴びたことによる高熱と下痢の症状を訴えていました。原爆が投下された後、一刻も早く家族に会いたか

った豊永さんは親戚と共に家族を探しに行こうと自宅に向かったそうです。ところが、変わり果てた街の様子はひどい有り様でした。先ほども少し話しましたが、範囲内の建物は爆風や熱線の影響で、見るも無残な状態のものが多くありました。また豊永さんが見た衝撃的な光景はそれだけではありません。それは熱線を浴びた人々の姿です。肌は黒くこげ、皮膚が垂れ下がったその姿はまるで幽霊のようだったと、豊永さんは話されていました。そのような人が数人ではなく大勢いたと想像すると、首がすくんでしまいます。

また、今回の研修ではもう1人の方からもお話を聞くことができました。広島市立本川小学校の平和資料館でボランティアガイドをされている岩田美穂さんです。この方は被爆二世と呼ばれ、母が被爆者となっています。母である智津子さんは両親と3人の妹の6人家族でしたが、原爆により家族全員を亡くした方です。岩田さんは、母の体験談とともに、平和資料館を案内してくださいました。この資料館は、爆心地に最も近い本川小学校の校舎の一部です。コンクリートで頑丈につくられていたので倒壊することはありませんでした。そのため、当時は臨時救護所となって使用されていたそうです。また、校庭では亡くなった方達が大勢焼かれ、そのまま埋められました。校舎の建て替え工事の際に校庭を掘り返すと、死者の灰と石灰の層が最大7層にもなって出てきたそうです。校庭に7層となると、原爆による死者がどれだけ多かったのか改めて思い知らされました。そのように多くの尊い命が奪われてしまったのだと思うと、残念でなりません。

このように原爆による被害は想像がつかないほど残酷であり、今も様々な影響をもたらしているのです。もしかしたら、世の中に自分とは関係ないと思う人がいるかもしれませんがそれは違います。例えば北海道と広島は離れています

が、同じ国で地方が違うだけです。少なくとも日本の国民として、この事実を



重く受け止めていただきたいと思います。今回お話をしてくださったお2人は共通して次のようなことをおっしゃっていました。「この事実を日本の歴史として終わらせてはいけません。平和のバトンをつないでいかなければならない」と。私は、この言葉をしっかり心に刻み、これから生きていきたいと思いました。最後になりますが、これを読んだ方々が少しでも原爆に関心を持っていただけると幸いです。



原爆投下。今から77年前の8月6日、それは広島豊かな町を襲いました。そして広島の人達の命、日常、未来を奪い去りました。原子爆弾を落とす原因となったのは戦争です。日本国憲法の第9条、『戦争放棄』に基づき今の日本は核兵器での被害がなくなり、自分たちは豊かな日常を過ごしてこられました。

苫小牧市は、「核兵器のない世界、恒久平和への実現」を目指し、非核平和都市条例を制定しています。その活動の一環として、私達は8月1日から3日間、実際に原爆の被害にあった広島県に行き、その惨禍を目の当たりにしました。そこで私はその惨禍を、今の世代、次の世代へと語り継がなくては、と思いました。

研修1日目では、広島で語り部をしている豊永さんのお話、その後平和記念資料館を見学させていただきました。豊永さんのお話では、自分の想像を絶する原爆の被害について聞くことができました。豊永さんはまだ9歳で原爆が落ちた日は、爆心地から10km以上離れた病院に通院していました。病院につく少し前、後ろでドカーンと音がしたそうです。それから台風の風よりもはるかに強い、立ってられないほどの爆風が豊永さんを襲いました。爆心地から近くにいた母と弟を探そうと急いで電車に乗ろうとしました。なかなか電車は来ず、やっと来たかと思ったら電車から出てきた人達を見て、豊永さんは衝撃を受けたそうです。服はボロボロ、顔は腫れ上がり、体中真っ黒。腕は皮膚が焼



けて垂れ下がり、ずっと「殺してくれ、イタイイタイ」の声を振り絞るように発していたそうです。私はこの話を聞いたとき、今の自分たちの体に起こるはずのないことが実際に起こったのかと鳥肌が立ちました。あの日、原爆は広島何万人もの人たちの命を奪いました。直接、熱線や爆風を受けなくとも、大切な人や家族を失い、間接被爆した人もいました。その人たちも含めたたくさんの被爆者の方達の深い傷はいえることはないと感じました。

そして平和記念資料館、2日目の本川小学校での岩田さんの話を聞いて、私は資料館でのボロボロに焼けこげてしまった一つ一つの物から“訴え”を感じ取りました。「二度と原爆の被害がこの世界にあってはならない」そう訴えていました。私はこの訴えを聞き流すことなく、私が代わりとなって訴え続けていかなければならないと思いました。

本川小学校でガイドをしてくれた岩田さんは「被爆してだいぶ、時間が経った後、写真を撮ろうとしたとき、母がうずくまってしまった。」と言いました。



原爆投下の前日に家族写真を撮っていたそうです。母の妹が被爆し、命を奪われました。時間が経っても忘れさせてくれない原爆の被害の辛さを自分事のように感じました。岩田さんの母の、生きた自分を悔やんでしまう姿はきっと忘れることはないでしょう。

広島は今、被爆した後、人々の懸命な努力により、豊かな都市へと生まれ変わりました。しかし、変わらないものがある

ります。それは原爆の被害を日本だけで終わらせようとする被爆者の方々、そしてこれからもあの日起こった惨禍を語り継ごうとする方々の“心”です。「核兵器のない世界」を願う人々の心は決して動くことはありません。その志を私達は次世代へと受け継がなければならない立場にあります。そして、核保有国ロシアのウクライナへの軍事侵攻でまたあの出来事が繰り返されるのかと、被爆者の方々も恐怖心を覚えています。核兵器のない世界が遠ざかりつつある今こそ、私達は「恒久平和の実現」を訴え続けるべきです。これは他人事ではありません。日本の人々が自分事のように『戦争』について考え、具体的なメッセージを発信することで、世界中の人々の心を少しでも動かすことができるはずです。今回の研修で被爆者の方々から受け取った平和のバトン。私達は平和といえる世界がやってくるその日までその足を止めてはなりません。



8月1日広島は気温が35℃。私たちは広島の地に降り立ちました。飛行機の中ではみんな和気藹々としながら、少し旅行気分も感じつつのフライトでしたが、一步外へ出た瞬間酷く蒸し暑く辛さすら感じました。私は一気に、77年前もこのような暑さだったのだろうか、と頭をよぎりました。今はクーラーなどがあり過ごしやすい環境でもそう感じたのに、77年前の8月6日、世界最初の原子爆弾が投下されたとき、どんなに悲惨な状況だったろうかと恐怖を感じたのが第一印象です。



広島に来てはじめに、被爆者の一人である語り部さんの豊永さんからお話を聞くことができました。豊永さんはわずか9歳で異様なきこ雲に包まれ、原子爆弾により一瞬で地獄と化した、広島町の光景を見てきたそうです。8月6日の朝早く、広島駅に行き病院までの列車に乗った豊永さんは8時過ぎに一人で歩いていると、後ろから大きな音が聞こえ、見たこともない熱い光が当たり、罪もない人が被爆しました。ようやくの思いで列車に乗ろうとした豊永さんは、人々が手を前に自分の皮膚を垂らし、全てを失ったかのようにひたすらそろそろと歩いていた驚きの光景を目にしたそうです。そして、広島は真っ赤に燃えていて、とても9歳の子にとっては耐えられない状況で、広島町全体に放射線が広がり、危険な状態であったそうです。そのような危険な経験をしたにも関わらず、今こうして豊永さんが生きていてくれてその時の状況を聞くことができるのは奇跡だと思いました。

また、私たちは語り部さんの話を聞いた後に平和記念資料館や本川小学校を訪れました。資料館に展示されている遺品には、それぞれ寄贈した人の思いが込められていました。私は今回の研修で戦争中の私たち同世代の人たちの生活を知りたいと思っていたので、資料館で今の自分の生活と比べて見学していました。戦時中は食べ物・生活用品が不足したり、学校で勉強ができなかったり、子どもも軍事訓練をしたり、家族と離れて暮らした学童疎開が行われたりしました。今では考えられない戦争の風景です。まず、食べ物・生活用品が不足していたことについて、今ではお店やネットですぐ手に入るものですが、昔はそうはいかず配給制だったことに改めて大変さを感じました。また、今は当たり前前にみんなが学校に通って勉強していますが、昔はいくら勉強したくても国のために働くことを強いられていたため、勉強することは叶わなかったそうです。そして男女問わず軍事訓練をしていたり、空襲を避けるために学童疎開をしていたことから、どれだけ戦争が激しかったかも伝わりました。実際、原爆が投下された8月6日の日も建物疎開作業で働いていた学生が多くいました。屋外の作業現場で被爆したため、たくさんの方が亡くなりました。

もう二度とそんなことは起こってはならない、私は強くそう思いました。現実にもなおウクライナはロシアの侵攻を受けています。語り部さんの豊永さんの話や平和記念資料館、本川小学校で目の当たりにした悲惨な状況が、令和という今の時代でも同じようなことが起きているのです。当たり前にご飯を食べて生活できていることは当たり前ではないのです。感謝の気持ちを忘れず、これからの未来、その当たり前が当たり前になれるように自分たちで作り上げていくしかないので。実際に起こった現実を正確に未来へ伝えていくことで、より戦争の無意味さ、残酷さ、辛さを感じていくことで心の抑止力につながる

のではないのでしょうか。戦争が終わっても、残された人たちの心は癒されず、戦争はいつまでたっても終わることがないと言います。私はそれも戦争の恐ろしさの1つではないかと思いました。この2泊3日の派遣事業に行かせていただき、教科書では知り得なかった事実を実際に肌で感じ、いかに戦争そして原爆が恐ろしいものなのかを知り、戦争は絶対にしてはいけないこんなに悲惨な



んだと言うことを伝えることはもちろんですが、生きられることの素晴らしさ、命の尊さ、それらを感じることができたらそれだけで人生はとても豊かになると私は思います。そのことを知ることで、周りの人のことを思いやり、自分のことも大切にできたら、それが一番平和への近道になるのではないかと感じました。そして、次世代に平和のバトンを私たちがつなげて行きたいと思いました。

事業の様子

令和4年7月22日（金） オリエンテーション・事前学習

研修当日の役割分担やスケジュール、注意事項を確認し本番への準備を行いました。

その後、事前学習として原子爆弾投下後の広島を鑑賞し、研修本番に向けて平和学習をしました。

令和4年7月29日（金） 市長表敬



オリエンテーション・事前学習を終え、広島派遣者で市長表敬を行いました。

それぞれ自己紹介を行い、研修に対する意気込みや研修に参加した動機を語り、岩倉市長から激励の言葉をいただきました。

6月27日～7月8日まで設置していた、折り鶴コーナーにより、今年度も市民の皆さまからたくさんの折り鶴をいただきました。

集まった折り鶴を在宅型有料老人ホーム「花みずき」の皆さまに千羽鶴にしていただきました。

御協力ありがとうございました。



令和4年8月1日（月）～ 8月3日（水） 本研修

《1日目》8月1日（月）

- *語り部・豊永恵三郎さんによる被爆体験講話を受講
- *広島平和記念資料館見学

《2日目》8月2日（火）

- *広島平和記念公園内「原爆の子の像」へ千羽鶴を奉納
- *本川小学校平和資料館慰霊碑へ献花
ガイドの岩田美穂さんによる解説と見学
- *世界遺産「厳島神社」見学



《3日目》8月3日（水）

- *帰苦

豊永恵三郎さんによる被爆体験講話、広島平和記念資料館見学

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。広島に世界で初めて原子爆弾が投下され、その年の12月末までに約14万人の人々が亡くなりました。

残留放射線によって被爆した語り部の豊永恵三郎さんから、被爆体験についてお話をいただきました。

その後、平和記念資料館を見学しました。広島平和記念資料館は被爆の実情を伝え、核兵器のない平和な世界の実現へ貢献するため設置されました。資料館では黒こげになった弁当箱、当時の光景を描いた絵、高熱で溶けたガラス瓶、被爆した方の遺品の数々などの被爆資料を展示しています。

▼語り部の豊永さんと



▼体験講話を聞く様子



平和記念公園、本川小学校平和資料館

【平和記念公園】

派遣者の在籍する各中学校の生徒が作成した千羽鶴と、苫小牧市民の皆さまから寄せられた折り鶴で作成した千羽鶴を『原爆の子の像』へ捧げました。



▲奉納した千羽鶴

【本川小学校】

本川小学校は爆心地から350m離れたところがあり、原爆により約400人の児童と校長先生のほか10人の教師が一瞬にして命をうばわれました。

この平和資料館は、昭和3年に広島で初めて建てられた鉄筋3階建ての校舎の一部で、被害を受けた状態をそのまま残し、被爆の「証」として保存されています。展示されている写真や遺物には、多くの人々の悲しみや願いが込められています。

ガイドの岩田美穂さんから岩田さんの母親が体験したお話や当時から現在までの小学校の様子をお話いただきました。



▲本川小学校資料館で岩田さんの説明を聞く様子



▲慰霊碑へ献花している様子

令和4年8月15日（木） 苫小牧市平和祈念式典

終戦の日に行われた平和祈念式典では、田中さんが派遣者を代表して広島派遣の体験感想文を発表し、派遣者全員で平和の誓いを朗読しました。

▼体験感想文を読む田中さん



▼「平和の誓い」を朗読する様子



『平和の誓い』

今から77年前の1945年8月6日、人々からすべてを奪い、地獄をもたらす原子爆弾が広島に落とされました。

大きな煙が広島の空に広がり、町や人々を黒く染めていきました。

見てください、自分の手を

あの時熱線が町を襲い、一瞬でその手の皮膚がはがれ、垂れ下がり誰かわからなくなるほど顔は焼けたされました。

生き残った人たちは家族を探し回りました。何日も何日も・・・。

そして原爆による被害は戦時中だけではなく、

今もなお人々を苦しめ続けています。

私たちは、そんな悲惨な出来事を繰り返さないために、平和を未来へつないでいく責任があります。

今回の研修で、数多くの尊い命が奪われる戦争は二度と起こしてはいけないことだと実感しました。

被爆者の方から繋いでもらった平和のバトンを、今度は私たちが繋いでいく番です。

二度と戦争を起こさないために、平和な世界を作るために、私たちが責任をもって後世に伝えていくことを誓います。

事後研修～各中学校での体験発表～

▼啓北中学校 小林 柊斗 君



▼光洋中学校 佐藤 大瑚 君



▼明倫中学校 田中 葵 さん



▼凌雲中学校 寺谷 仁翔 君



▼緑陵中学校 片野 梨花 さん



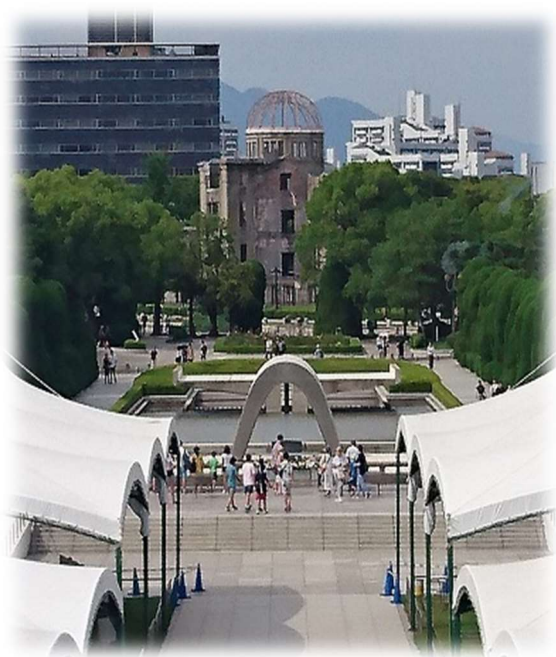
▼体験発表を聞いた緑陵中学校の生徒が作成した“平和の灯”



広島派遣事業の事後研修として各中学校で派遣者による体験発表を行いました。実際に被爆地に行き、感じたことや見たものを他の生徒達にも伝え、平和について考えてもらう時間を設けました。それを聞いた皆さまは、家族や友人に伝え、一人でも多くの市民の方々に広がることを願っています。

協力していただいた各中学校の皆さまありがとうございました。

その他 本研修の様子



▲資料館本館からの景色

本館の展示場を抜けると、戦没者慰霊碑と原爆ドームを一望できる場所がありました。平和記念公園では平和記念式典の準備をしていました。



▲平和記念公園の「原爆の子の像」

2歳の時に被爆した佐々木貞子さんが、10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、同級生たちが慰霊碑をつくろうと呼びかけ、昭和33年に完成しました。



▲原爆ドーム横のベンチ

原爆ドーム横の歩道には川に沿ってベンチがありますが、その並びに原爆ドームの崩れた柱の一部が置かれています。

苫小牧市非核平和都市条例

わたしたち苫小牧市民は、安全で健やかに心ゆたかに生きられるように、平和を愛するすべての国の人々と共に、日本国憲法の基本理念である恒久平和の実現に努めるとともに、国是である非核三原則の趣旨を踏まえ核兵器のない平和の実現に努力していくことを決意し、この条例を制定する。

(目 的)

第1条 この条例は、本市の平和行政に関する基本的事項を定め、市民が安全で健やかに心ゆたかに生活できる環境を確保し、もって市民生活の向上に資することを目的とする。

(恒久平和の意義等の普及)

第2条 市は、日本国憲法に規定する恒久平和の意義及び国是である非核三原則の趣旨について、広く市民に普及するように努めるものとする。

(平和に関する交流の推進)

第3条 市は、他の都市との平和に関する交流を推進するように努めるものとする。

(その他平和に関する事業の推進)

第4条 市は、前2条に定めるもののほか、平和の推進に資すると認める事業を行うように努めるものとする。

(平和の維持に係る協議等)

第5条 市長は、本市において、国是である非核三原則の趣旨が損なわれるおそれがあると認める事由が生じた場合は、関係機関に対し協議を求めるとともに、必要と認めるときは、適切な措置を講じるよう要請するものとする。

(核兵器の実験等に対する反対の表明)

第6条 市長は、核兵器の実験等が行われた場合は、関係機関に対し、当該実験等に対する反対の旨の意見を表明するものとする。

(委 任)

第7条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

(平成14年4月1日公布)



【 発 行 】

苫小牧市総合政策部政策推進課

所在地：〒053-8722 苫小牧市旭町4丁目5番6号

電 話：0144-32-6039 FAX：0144-34-7110

E-mail：seisaku@city.tomakomai.hokkaido.jp

(令和4年10月1日)